金鼎国後宮の華妃2
妖の猫と蘇りし皇子

シアノ Shiano

アルファポリス文庫

https://www.alphapolis.co.jp/

序章

大陸において最も栄えし大国、金鼎国の後宮には『黄金樹』と呼ばれる不思議な巨木があった。その幹は捻れながら天に伸び、うっすらと黄金の光を帯びて輝いている。

だが、一年を通して一枚の葉すらもつけることはない。

ただ一度、金鼎国の太子が成人を迎える時、その黄金樹は無数の蕾をつけるのだ。

何もしなければ花は決して咲かない。だが、太子の妃候補にその蕾を一輪ずつ持たせると、ただ四人だけが美しい黄金色の花を咲かせることができるという。

その花を『黄金華』と呼び、花を咲かせた四人の娘は『華妃』と称される。

太子は四人の華妃の中から一人を選び、正妃と定める。

選ばれしその一人は、ゆくゆくは皇帝の正妃となり、絶大なる権力を持つのだった。

一章

金鼎国後宮の青空は、すっかり春めいて白く霞(かす)んでいた。
潮の香りと花の香りが混じった風が頬を撫でていく。
「すっかり春だなぁ……」
窓際の椅子に腰掛けた燐(りん)は、ぼんやりと風の香りを嗅いで空を仰いだ。
燐がいるのは静波殿(せいはでん)という建物だった。
広い後宮の真ん中付近にあるため、名前に波とつくのに波音は聞こえない。だが、屋敷の周囲に木々が多く植えられており、風が吹くとザアッと音を立てるのが波音のように聞こえるというのが、由来だそうだ。
燐は昨年の晩秋、黄金華を咲かせて華妃になってしまった。正式なお披露目をして与えられたのが、この静波殿である。
そうして華妃になってから数ヶ月。短い冬は瞬く間に終わり、とうとう春が来てしまっていた。

ようやく華妃としての生活に慣れてきたが、楽しいかと言われたら首を横に振る。華妃の生活は決まりごとが多く、仕事はないが自由もなくひたすらに退屈で、おまけに宮女たちの人間関係がとにかく厄介なのだ。
風が吹き込むたび、燐の髪も揺れる。灰色で、もさもさと毛量ばかり多い癖毛だったのはかつての話だ。宮女たちから毎日手入れをされた髪は、以前に比べると艶(つや)も増し、銀色と評されることも増えていた。
華やかさと着心地のよさを両立した絹の着物は毎日交換され、喉が渇いたと思えば、言う前に飲み物が用意される。毎食、贅(ぜい)を凝(こ)らしたものが用意され、ただの宮女だった頃にはあんなに貴重だった甘味も飽きるほど出てくる。何不自由なく与えられ、子供時代の燐からすれば天国のような生活をしていた。
けれど、楽しくない。
燐は春の麗(うらら)らかさに不釣り合いな大きなため息を吐いた。
ため息に合わせて春風が木々を揺らす。その音に混ざり、まさに今悩んでいる宮女同士の揉める声が聞こえてきて、燐は顔を顰(しか)めた。
「……あのぉ、どうしていつも頼んだことができてないんでしょう？　そんなに無茶なこと言ってますかねぇ？」

あの語尾を伸ばした独特の話し方は、燐付きの宮女である玉玲（ぎょくれい）だ。
放っておきたいが、そういうわけにもいかない。燐は渋々立ち上がり、声のする方に向かった。
廊下の片隅で、玉玲とおどおどした年若い宮女が向き合っている。
「す、すみません。頑張ったんですけど、どうしても終わらなくて」
今にも泣きそうな顔の年若い宮女は、確か静波殿に来たばかりだったはずだ。燐はまだ名前を覚えていない。
「うーん、頑張るとか頑張ったとかいつも言いますけどぉ、結果が出ない頑張りに意味あります？　それって、無駄でしかないですよねぇ」
対する玉玲は、後宮勤めはまだ半年程度だが、その前に数年、地方の離宮で働いていた経験があるらしく、静波殿で一番仕事ができる宮女だ。まだ仕事のおぼつかない新人に思うところがあるのだろう。垂れ目と、おっとりした喋り方（しゃべ）から優しそうに感じるが、話す内容はかなり辛辣（しんらつ）だ。叱られている年若い宮女は俯（うつむ）き、目に涙を浮かべて小動物のように震えている。
（はあ、またやってる……）
こういう時に口出しするのは苦手だ。元々人間嫌いな燐は、人間関係のゴタゴタなど一切関わりたくないと思っている。しかし、華妃としてこの静波殿を与えられているのと同様に、静波殿の宮女は燐の部下であり、彼女たちの仲裁もまた燐の仕事なのだ。
重い責任が乗り、肩ばかり凝る。
（あーあ、華妃になんて、なるんじゃなかった……）
燐は、また出そうになったため息を呑み込み、玉玲たちに向かって口を開いた。
「ちょっと待った。二人とも、少し落ち着いて。玉玲も少し頭に血が上ってるでしょう。深呼吸して、それから何があったか教えて」
「り、燐様……。お見苦しいところを見せてしまってすみません」
燐が現れたことで、玉玲は我に返ったらしい。年若い宮女の方はといえば、わぁっと燐に泣きついてきた。
「もう玉玲さんと仕事するのは無理ですっ！　辞めさせてください！」
やっぱりこうなったか、と燐はこめかみを押さえた。
玉玲もバツが悪そうな顔をしている。
それから、なんとか年若い宮女を宥（なだ）めて辞めるのは撤回してもらったが、元凶の玉玲がこのままではまた同じことの繰り返しだ。

燐は年若い宮女を部屋に戻すと、玉玲に向き直った。
「ねえ玉玲。気持ちはわかるんだけど、少し言いすぎ。あの宮女はまだ入ったばかりなんだし、手加減してやってよ」
燐がそう言うと、玉玲はふうっと息を吐く。
「……燐様、お言葉ですけど、入ったばかりっていうのはいつまでなんですか？　あの子はそろそろ三ヶ月になります。でも、いつも頑張るって口ばかりで、仕事も全然覚える気がないんですぅ。玉玲は毎日、あの子の三倍以上働いていますけどぉ」
玉玲はぷっくりした唇を不満げに尖らせている。
「え、あの子、もう三ヶ月になる？」
あの宮女が来てからそんなに経っているとは驚いた。宮殿勤めの宮女は気の利いた娘なら一ヶ月で戦力になる。そうでなくても、二ヶ月勤めていれば一通りできるのが普通だ。三ヶ月で新人扱いはよっぽどである。
そもそも燐は、三ヶ月もいるというあの宮女の名前も未だに覚えていなかった。興味のないことは全然見えていないのが自分の悪癖だと自覚している。煩わしい人間関係が苦手だし、人の顔と名前を覚えるのもさして得意ではない。だが、さすがに周囲を見ていなさすぎたと、玉玲に申し訳なくなった。

「あの子、いつまでも新人ですぅって顔で最低限の仕事も終わらせられないから、ちょっと厳しく言っただけなのに、もう玉玲の方が泣きたいですよぉ」
「……それは、ごめん。私もいつも玉玲に頼ってばかりだったよね」
謝ると、玉玲も頭が冷えたようで、垂れ気味の眉をさらに垂れさせた。
「燐様が謝られることではありませんよぉ。確かに言いすぎましたし、頼られるのも玉玲があまりに優秀すぎるせいですから」
（……優秀って自分で言っちゃってる。けどその通りなんだよね）
「次からは遅くても口出しせず、責任を持って最後までやらせた方があの子のためかもしれませんねぇ」
玉玲の言う通り、優秀な人がそばにいるから頼りすぎてしまうこともあるだろう。
「じゃあ、午後はあの子に側付きになってもらおうかな」
今日は午後から、華妃の一人である黒曜の屋敷で茶会に出席する予定だった。責任ある側付きの仕事は玉玲に頼むつもりだったが、あの宮女にやらせた方が、成長に繋がるかもしれない。
「承知しましたぁ。ではその間、玉玲は手が空いてしまいますし、何か罰をお与えください」

「玉玲は悪くないのに、罰なんて与えられないよ」
しかし、玉玲はフルフルと首を横に振った。
「いけません。主人から咎められたのに休憩を与えてしまっては、玉玲を依怙贔屓したことになってしまいますぅ。そうですねぇ、写経なんかがいいでしょうか」
「なんで写経？」
首を捻った燐に、玉玲はニコニコしながら教えてくれた。
「ちょっとした罰なら自室での写経を命じるのが定番なんですよぉ。例えば、上蓮宝心経の写経なら、書き終えるのに大体二時間くらいかかりますが、その間はのんびり自室で過ごせます。罰にはなりますが、さほど辛くないんですよねぇ」
なるほど、と燐は頷く。経典は宮中祭祀で使うため、どこの宮殿にも必ず数冊置かれている。それを写す作業は手軽な罰という扱いのようだ。
「わかった。じゃあ、午後は自室での写経を命じるよ。写経が終わって時間が余ったら、好きに過ごして構わないよ」
「はぁい。かしこまりました」
燐の指示で正解だったらしい。玉玲は満足そうに微笑んで去っていった。
孤児として育ち、その後も仙郷にいた燐には人を使うという感覚がわからない。そ

んな燐に、玉玲は遠回しに教えてくれることもしばしばあった。華妃の立場は面倒くさいし、燐はまったく向いていない。それでも今の玉玲のようにそっと力になってくれる人がいるのがありがたく、心強かった。
（でも、ちょっと玉玲に負担がかかりすぎだよね……どうにかならないかな）
だが、いくら華妃とはいえ、燐のような怪しい立場では、新しい宮女が入ってくるなど滅多にない。人手が足りなくても、玉玲が優秀だからなんとかなっているだけなのだ。
それから燐は玉玲と別れ、もう一人、側付き用の宮女のなり手がいないか探していた。不慣れな宮女一人に側付きをさせるのは心配だからだ。誰に頼もうかと考えながら廊下を歩いていたが、ふと天井裏から聞こえてきた小さな足音と、子供のような声に足を止めた。
「ねえねえ、燐。外で人間がピーチクパーチク、鵯みたいに騒いでるよ」
この声は鼠だ。鼠の妖である采王の配下の鼠だろう。燐は動物の話していることがわかる異能を持っている。
「教えてくれてありがとう。お礼に私の部屋にあるお菓子を一つ持っていって」
「やった！」

鼠はトトトと小さな足音を立てて消えていく。

采王の配下の鼠は、何かあると燐に報告をしてくるのだ。協力はありがたいが、報告されるということは、燐にとって頭が痛くなる事態が起きている、ということでもある。

外だと言っていたから玄関の方だろう。

足音を立てずに向かうと、玄関を出てすぐの場所で、静波殿の宮女がよその宮殿の宮女に話をしているようだ。

（またやってる。……確かに鵯みたい）

甲高い声で楽しそうに喋っているのが聞こえ、そっと覗くと、茶色の髪が見えた。

予想通りの宮女の姿に、燐はこめかみを押さえた。

彼女の名前は可宝。お喋りな性質で、暇さえあれば話し相手を捕まえてずっと喋っている娘だった。

お喋りが多くても、きちんと仕事をしてくれるならとやかく言うつもりはない。だが、可宝の場合はその頻度もさることながら、内容が問題なのだ。

「――で、深夜に扉をコン、コンって叩く音が聞こえたの！　こんな時間におかしいなって思って、扉を開けたんだけど誰もいなくて。月もない真っ暗な夜よ。ねえ、あ

たし、ゾーッとしちゃって！」

可宝が好むのは、いわゆる怪談だった。相槌を打つよその宮女は、可宝の怪談に怖がりながらも目を輝かせている。おそらく、戻ったら静波殿の怪談として噂を広めるつもりだろう。

（……怪談なんて嫌いだ）

燐は堪えるように拳を握り込む。

ほんの数ヶ月前、後宮で何人も亡くなった。その中には燐にとって初めての友人だった秀雲もいた。そんな燐の周囲で起きる怪談など、噂好きな宮女には格好の餌食になることだろう。

けれど燐は、実際にあった不幸を娯楽として消費してほしくない。いつか、秀雲の死まで面白おかしく扱われてしまうかもしれないからだ。

可宝が怪談やおかしな噂話をするたびに咎めてきたが、一向にやめない。

怒りのままに可宝を怒鳴りつけてしまいそうで、燐は息を整えて心を落ち着かせながら可宝の話を立ち聞きしていた。

「怖いでしょ！　でも、それだけじゃないのよ。後宮に赤ん坊なんていないはずなのに、暗がりから赤ちゃんの泣き声が聞こえたんだから！」

赤ちゃんと聞いて、ふと燐は顎に手を当てた。
基本的に後宮は女の園であり、赤ん坊がいても皇帝か太子の妃が産んだ子だけだ。だが、現在は皇帝の子たちも大きくなり、赤ん坊と言える年齢の子供はおらず、太子の紫貴も正妃を決める真っ最中で、まだ子供がいない。なのにいるはずのない赤ん坊の泣き声が聞こえたら、正体不明で確かに怖いだろう。人は、見えないはずのものが見え、聞こえるはずがないのに聞こえるからこそ恐怖を感じるのだ。
話を聞いているうちに燐の心も落ち着き、さらに思いついたことがあった。
（そうだ、この手で行こう）
聞かれているとは気付かず、調子よく話し続けている可宝に声をかけた。
「――ちょっと、可宝」
途端に可宝は気まずい顔になった。よくないとわかっていてやっている反応だ。これまでも何度か注意しているのだから、そんな顔になるのも当然だろう。
「り、燐様……あの、これは……」
しどろもどろで言い訳しようとする可宝に、燐は無理して笑顔を見せた。
「ねえ、その赤ん坊の泣いている声って、猫だったんじゃない？」
燐から怒られると思い込んでいたらしい可宝は、目をパチクリさせて聞き返す。

「え、猫……ですか？」
「そう。春頃の猫の鳴き声って、赤ちゃんの泣いている声に似ているんだ。どこかの宮殿で飼われているのか、またはこれだけ広い後宮だから野良猫がいるのかも。ほら、この後宮に鼠が多いのは知ってるでしょう。鼠避けには猫が一番だし、飼われていてもおかしくないよね」
燐は敢えて可宝の話を否定せずにそう言った。
噂というのは強く否定すると、かえって信憑性があると言われ、広まりやすい。人間は自分だけが真実を知っていると思い込みたいからだ。
だから広めたくないなら、いっそ勘違いの笑い話にしてしまえばいいのだと、仙郷で天翼童子から教わったことがあった。
「確かに猫かもしれませんね。わたくしも後宮に来る前ですが、野良猫の鳴き声に驚いたことがありますわ」
話し相手の宮女もそう頷いている。
「そうそう。山で女性の悲鳴が聞こえて、すわ事件かと思いきや鹿の鳴き声だった、なんていうのも有名な話だよ」
「まあそうですのね。興味深いお話ですわ」

よその宮女は納得したように頷いたが、可宝は唇を尖らせた。
「赤ん坊の泣く声は猫だったかもしれないですけど、じゃあ、深夜に扉を叩く音はなんですか。あたし、夜番の時に確かに聞きましたもん！」
もちろんそれも、話している間に考えてある。
「夜番ってことは、屋敷の西側の控えの間だよね。それなら扉を叩く音の正体は虫だよ。西側には木がたくさん生えているし、草がボーボーで虫が多いんだ。控えの間の扉の前には灯り番が常夜灯を吊るしているから、光に誘き寄せられた甲虫が扉にぶつかって、扉を叩くような音がするんだ」
「ま、まあ……虫ですか」
「早朝に常夜灯の下を見てごらん。死んだ虫がたくさん落ちていてゾッとするよ」
よその宮女は虫が苦手らしく、燐の話に嫌そうな顔で腕をさすっている。なんなら、虫がたくさんいる静波殿から、一刻も早く立ち去りたいそぶりをし始めた。
宮女たちが怪談を好むのは、面白おかしい怖い話を求めているからだ。そもそも『怖い』にもいくつか種類がある。怪談の『怖い』は娯楽になるが、虫に対する『怖い』は宮女たちも嫌がり、娯楽にならないのだ。つまり、噂も広がらないわけである。
「そうだ、可宝。午後の仕事のことで話があったんだ。ちょっといい？」

そこで燐が思い出したように話を切り出せば、早くここから去りたい宮女も心得たように大きく頷く。
「あら、では、わたくしはこれで失礼いたしますね」
よその宮女はそそくさと静波殿から出ていき、この場には燐と、バツが悪そうな顔をした可宝が残された。
「ええとぉ……あの、燐様……怒っていますか？」
可宝は両手の指をもじもじさせ、上目遣いで燐を見てくる。これまで何度も注意していたし、怪談はやってはいけないことだと理解していた様子だ。
そんな可宝に、燐は首を横に振ってから答えた。
「もう怒ってない。でも、注意はするよ。楽しくお喋りしたい気持ちはわかるけど、怪談だけはやめてほしいって前にも言ったはずだよね」
「申し訳ありません……」
可宝はシュンと肩を落とす。
だが同じようなやり取りはもう何度目だろう。以前も、死んだ宮女の死体が消えた、病死した宮女が生き返ったという出鱈目を吹聴していたことがあった。人手不足だから首にされないと思って、全然懲りないのだ。

「今度こそしっかり反省して、二度とやらないで。さすがに次はもう許さないから。午後のお茶会で、可宝に側付きを頼もうと思っていたけど、これじゃ任せるわけにはいかないね」

華妃の側付きとして表に出ることは、宮女にとって名誉なのだそうだ。他の華妃や太子の紫貴に顔を覚えてもらう絶好の機会なため、側付きをしたがる宮女は多い。

「そうですか、わかりました」

だが、可宝は残念がる様子もなく、あっさりと頷いた。てっきり可宝も側付きになりたがっていると思っていたのだが。

「……あ、そういえば可宝は玄武殿にいたんだっけ」

燐はふと思い出した。可宝は元々、玄武殿の宮女だった。燐が本物の華妃として静波殿を賜った際に、異動を志願したと聞いたことがある。

「ひょっとして、黒曜と顔を合わせたくない理由でもあるとか？」

「い、いえ、大きな理由があるわけではないんですが、黒曜様はとても厳しい方だったので……その……」

可宝は目を逸らし、言葉を濁した。

華妃の一人である黒曜は石安国の公主なのだが、その分気位が高く、嫌味も多い。

普段から宮女にも厳しいのだろう。可宝のようにお喋りな宮女なら、黒曜から何度も叱責されていたのは簡単に想像がつく。自分から異動を願い出たのもあって、顔を合わせるのが気まずいのかもしれない。

「それよりも、燐様。側付きの仕事がないのでしたら、午後は休みをいただいてもいいのでしょうか？」

可宝は期待に目を輝かせている。だが、叱られるようなことをした可宝に、ご褒美のような休憩を与えるのは何か違う。

ふと、玉玲が罰には写経が定番だと言っていたと思い出した。まさに今与えるちょっとした罰としていいかもしれない。

「そうだ、怪談の罰として、午後は自室で写経するように」

「えー！　あ、でも待ってください。写経って、上蓮宝心経ですか？」

「うん。お茶会から戻ってきたら確認するから、真面目にやりなよ」

「わかりました！　あたし、心をこめて写経をします！」

一瞬、可宝の眉根が寄せられたが、すぐに笑顔になった。

思っていた反応と随分違う。可宝なら面倒くさがって、ぶーぶーと文句を言いそうだと考えていたから、少し意外な気がする。

（でもこれで懲りて、怪談をやめてくれると助かるんだけど）

どこか安堵した様子で去っていく可宝の背中を、燐は見送った。

午後二時からの約束に合わせ、側付きの宮女たちを連れて静波殿を出た。

今日は黒曜が開催するお茶会に出席する予定だ。

四人いる華妃から、太子である紫貴の正妃が選ばれるのだが、華妃たちは自分こそ正妃に相応（ふさわ）しい存在であると示すため、こぞって催（もよお）しを開き、太子との交流を深めようとするのである。

向かったのは静波殿からほど近い場所にある烏鵲殿（うじゃくでん）だ。

黒曜は元々玄武殿にいたのだが、昨秋の事件では玄武殿で偽華妃の翠蓮（すいれん）が亡くなった。人が死んだ場所では暮らせないと訴えた黒曜の意見を汲（く）み、代わりの宮殿を紫貴が用意したのである。

烏鵲殿は渋墨（しぶすみ）塗りの黒い木材を使った建物だ。色のせいもあって、一見すると地味に感じる。だが室内に一歩足を踏み入れると、黒曜が持ち込んだ贅を凝らした調度品があちこちに飾られ、以前の玄武殿同様に豪奢（ごうしゃ）な印象のままだ。

ただ、玄武殿より建物自体が小さく、飾りきれないせいか調度品の数は前より少ない気がする。それでもこれだけ豪奢なのだから、ただ減らしているのではなく、厳選

して飾っているのだろう。

特に見事なのは、入ってすぐの位置に置かれた巨大な紫水晶だった。床から燐の腰までである見事なもので、水晶の産出国として有名な石安出身の黒曜らしさを感じる。紫水晶は楕円の半球状になっており、内側の結晶部分がキラキラしていて、つい見惚（みと）れてしまう美しさだ。

（水晶が見た目よりずっと硬いのは知ってるけど、実際に見てみると、うっかり倒しでもしたら壊れそうな気がして怖いな）

横目で美しい水晶の調度品を見ながら、建物の奥にある聚会室（しゅうかいしつ）まで案内された。

建物内の基本的な間取りは燐の静波殿と大差ない。聚会室の奥には丸い小窓があり、庭で白い花が満開なのが見えた。風が吹き込むたびに白い花びらがちらほらと入り込む光景は風流で美しい。

「静波殿の燐様、ご到着にございます」

燐は最後の到着だったらしい。太子の紫貴と、燐以外の華妃はすでに揃って卓についている。

いや、それどころか、どう見てもお茶会はとっくに始まっている様子だ。

彼らの前に並ぶお茶やお茶菓子の減り具合からすると、開始から結構な時間が経っ

ているように見える。時間通りに来たはずなのにおかしい。
「あらぁ、一時間も遅刻だなんて、もしかして、準備に時間がかかってしまったのかしら。わたくし、てっきり今日は来ないのかと思っていたわ」
お茶会の主催である黒曜は嫌味ったらしくそう言った。
その言い方に、いくら鈍い燐でもピンときた。黒曜は燐にだけ茶会の開始時間を一時間遅く伝えたのだ、と。あからさまな嫌がらせだ。
案内の宮女に視線を向けると、宮女は知らないというように泣きそうな顔で首を横に振った。宮女のせいにするのも可哀想だ。
「遅れてごめんなさい。私が時間を間違えて覚えていたみたい」
燐はそう言って、表情を変えずに案内された扉近くの席につく。
（はあ、くだらない）
黒曜は燐が気に食わないのだ。意地悪をされたからといって別に傷付かないが、面倒くさいとは思ってしまう。こんな扱いを受けるたび、燐は仙郷に帰りたい気持ちが再び強まるのを感じていた。
「ふーん、間違えて……ねえ。そんなこともあるのねえ」
黒曜と仲が良くない丹飛（たんひ）は含みのある言い方で黒曜に視線を向けるが、黒曜は素知

らぬ顔だ。
残る一人の百蘭（ひゃくらん）は、燐の遅い到着にも、黒曜の嫌味な言葉にも気にした様子はない。基本的に彼女は他の華妃に興味がないのか、我関せずを通していた。
唯一、燐に歓迎の笑みを向けてくれたのは、太子の紫貴だけである。
「体調でも悪いのかと心配していた。君の顔が見られて嬉しい」
白皙（はくせき）の顔に、彫刻のように刻み込まれた形の良い唇を綻（ほころ）ばせた姿は、今が盛りの花さえ恥じ入って散ってしまいそうなくらいで、美女揃いの華妃に負けないほど美麗だ。
わざわざ意地悪をしたのに当の本人である燐は無反応だし、紫貴の笑みは燐に向けられているし、思うような結果にならなかった黒曜は不満そうに自慢の長い黒髪をいじっている。
それより燐は紫貴から向けられた微笑みに、ソワソワと落ち着かなくなった。彼に視線を向けられると、何故だかこの場から今すぐ立ち去りたい気分になってしまう。
（さっきの紫水晶の結晶みたいに、綺麗すぎると壊してしまいそうで落ち着かない、とか？）
深く考えたくなくて、そういうことにしておこうと燐は思ったのだった。

せっかくのお茶会だったが、主催の黒曜はあれこれ嫌味ったらしい物言いを続け、丹飛はそんな彼女に突っ掛かる。百蘭はそんな二人を歯牙にもかけない。紫貴は誰かに肩入れすることなく中立だったが、ひたすらギスギスした時間が続き、正直なところ燐はまったく楽しくなかった。いや、きっと全員楽しくはなかっただろう。

（こんな調子じゃ、正妃を選ぶなんてできなそう）

燐はそう他人事のように考える。いや、実際他人事も同然だ。紫貴に渡された黄金華の蕾を咲かせたために華妃になってしまったが、自分が正妃になるつもりなど、さらさらなかった。

燐の異能や、今は仙術で隠している青い瞳は、青彷国の旧王朝の特徴らしく、燐はその血を引いている可能性が高いそうだ。それでも育ちは貧しい村でこき使われていた孤児で、死にかけたところを拾われて数年仙郷で過ごしただけである。

太子の正妃は後々、政治にも深く関わる必要がある。燐には他の華妃のような実家の後ろ盾もない。

だから、自分が正妃に選ばれるはずなどなく、むしろ、華妃になったのは、紫貴が正妃を選ぶ手伝いをするためなのだと考えていた。

だというのに、昨秋の偽華妃事件で燐が紫貴に協力していたせいか、黒曜はやけに

当たりがきついのである。

（……まあ、無理もないか）

偽華妃を炙り出すためとはいえ、玄武殿で黒曜のお茶会をめちゃくちゃにしてしまったのだ。嫌われたのも当然だろう。

そんなことを考えているうちに時間は過ぎる。お茶会は大体二時間程度と聞いていたが、燐の想像通り一時間遅らせた時間を教えられていたようで、燐が到着してからほぼ一時間で終了した。

「燐、息災だったか？　久しぶりに顔を見た気がする」

帰ろうとしたところで紫貴に声をかけられ、燐は今日一番ホッとした気持ちになる。

実は燐も同じことを考えていた。

太子の役目はとにかく忙しいらしく、前回彼に会ったのは丹飛の朱雀殿に呼ばれた時で、かれこれ十日は経っているだろう。その時もほとんど話せず、会釈をしただけで終わったはずだ。

昨年の秋の事件ではよく一緒に過ごしたが、最近は会うことが随分減ってしまった。紫貴の華妃になったのに、宮女だった時に比べ、距離は開いていく一方だ。

「紫貴様もお元気そうで何よりです。……その、最近はいかがですか？」

「ああ、特に問題はない」
昨年の秋、異母弟の楓葉に呪われた紫貴は、血筋に眠る饕餮の力を宿すという異能を暴走させられてしまい、異形の姿になってしまった。それを仙女の指輪の力を借り、燐の異能で解決したのだ。
人目があるため言葉を濁して伝えたが、紫貴は意図を理解してくれたらしく、目を細めて頷いた。今はもう呪いから解放されているとわかっているが、元気そうで安心する。
（紫貴様は我慢強いから……）
紫貴は呪いで苦しいのを協力者だった燐にも言わず、耐えていたことがある。見た目の麗しさとは裏腹に、どれだけ辛いことでも黙って耐えてしまう強靭な精神力を持っているのを知っていた。だからこそ、燐は紫貴に力を貸してやりたいと思うのだ。
「もし何かあれば、早めに教えてください」
「ああ。……燐」
不意に紫貴が手を伸ばし、燐の髪に触れた。
「ふぁっ⁉」
紫貴の顔が近づき、心臓がドキッと跳ね上がる。

「ああ、すまない。髪に花びらが引っかかっていた」
そう言われ、紫貴の指先を目で辿ると、白い小さな花びらを摘んでいるのが見えた。気付いて取ってくれただけのようだ。
「驚かせてしまったか」
「い、いえ。ありがとうございま――」
ます、と言おうとしたところで、燐は横からドンッと押され、一歩左によろめいた。
今まで燐がいた場所には丹飛が立っている。彼女は鍛えあげた体幹と立派な腰を使って体当たりの要領で燐を突き飛ばし、割り込んできたのだ。紫貴もさすがに目を丸くしているが、丹飛は構う様子なく、にっこりと微笑む。
「ねえ紫貴様、次はあたしが朱雀殿にお呼びしますわ。来てくださいますよね？」
「あ、ああ、もちろん。燐、大丈夫か？」
はい、と言おうとしたところで、またぐいっと押されて誰かに割り込まれた。
「あーら、前回も朱雀殿でしたのに？」
次は黒曜だった。燐と丹飛の間に無理矢理体を捩じ込んでくる。そのせいで紫貴との距離はますます開いてしまった。紫貴は困った顔で燐を見たが、気にしないでと言う代わりに軽く首を横に振り、紫貴に会釈だけして離れた。

割って入ってきた丹飛と黒曜に、燐は怒る気にはならなかった。
同じ華妃であっても、彼女たちと燐では住む世界が違う。
黒曜と丹飛はどちらも目立つ存在だ。
黒曜は石安国の公主という立場で、家柄だけなら一番だろう。彼女が正妃になれば石安との国交関係は長く安泰になる。気位は高く意地悪だが、見目麗しく上品で、特に長く艶やかな黒髪は類を見ない美しさだ。
丹飛は代々将軍を務める家系だそうで、父親は高名な大将軍なのだとか。彼女を正妃にすれば国防に関しては安心できることだろう。本人も運動神経に秀でており、舞は舌を巻くほど上手だ。それ以外にも楽器演奏など特技も多く、才能豊かだ。そして何より、華妃の中では飛び抜けた美女である。類稀なる美貌の持ち主である紫貴と並んでも、その華やかさは決して引けを取らない。
黒曜か丹飛が正妃として有望と思われていそうだし、本人たちもその自覚があり、張り切って紫貴との交流を深めようとしている。彼女たちの立場を考えれば当然なのだろう。
（……とはいえ、この二人は本当に仲が悪いな）
自分を押し除けた二人に視線を向ける。

「あらまあ。丹飛はまたあの派手派手しい舞や楽器の演奏をするつもりなのかしら。やかましくて頭痛がしてしまうのよねぇ」
「は？　公主ともあろう者が、歌舞音曲の良し悪しもわからないのかしら。あたしの舞も演奏も、都じゃお金を取れるくらいだけど？」
「ほほ、ご自分だけが楽しいお遊びでお金を取れるなんて、冗談がお上手だこと」
「なんですって？　黒曜こそ、また代わり映えのないお茶会だったじゃない。こっちはもう飽き飽きしてるのよ！」
と、まあこんな感じで、さっきまで紫貴を奪い合っていたのに、気が付けば紫貴そっちのけで言い争っているのである。彼女たちの舌戦は止まることを知らない。
ここまで不仲だと、もし丹飛と黒曜のどちらかを正妃に選べば、選ばれなかった方の怒りが爆発し、想像するのも恐ろしい争いに発展しそうだ。
そもそも、紫貴は皇帝の長男のため太子に選ばれたが、正妃の子供ではない。それで紫貴の母は正妃に憎まれているそうだし、紫貴も正妃の息子である楓葉から太子の座を奪われそうになったという経緯がある。黒曜たちが今のままなら、どちらかを選んでは今の代の二の舞になってしまう。それだけは避けるべきだ。
「――あの、紫貴様。先日教えていただいた本を読み終えました」

そんな静かな声が聞こえて、燐はふと声の方に視線を移した。
黒曜たちが争っているうちに、華妃の残る一人である百蘭がちゃっかりと紫貴と二人きりで話している。
「もう読んだのか。読むのが早いんだな。百蘭は読書家だから目が肥えているだろう。俺が勧めた本には興味がないかもしれないと思っていたんだが」
「そんなことはありません。自分では選ばない分野でしたので、かえって興味深かったです。他にお勧めがあれば、もっと教えていただきたくて」
百蘭は色白の顔をほんのり桃色に染め、珍しくたくさん喋っている。
紫貴は努力家で勉強熱心だから、本もたくさん読んでいるのだろう。読書家の百蘭とも話が盛り上がっているように見えた。
燐はふと思いつく。
（……そうか。百蘭を正妃にすればいいんだ！）
黒曜と丹飛のどちらかを選べば拗(こじ)れるのなら、残る一人である百蘭を正妃にしてしまえば解決するのではないだろうか。
百蘭は宰相の娘だと聞いた覚えがある。家柄はじゅうぶんよく、読書家で賢い様子だ。もちろん美人だし、正妃となっても極端に見劣りすることはない。黒曜たちと

違って自己主張は激しくないが、そういう控えめなところも好感が持てる。
百蘭を正妃にするための手伝いをしよう。
燐が後宮に残って数ヶ月。自分が何をすればいいのか、ようやくわかった気がした。
燐は仙郷で天翼童子から教わった数々の知識を有している。そのほとんどは特に役に立たないが、何かしらの協力はできるだろう。
しかし、燐は急に胃の腑(ふ)のあたりがぎゅうっと嫌な感じがすることに気が付いた。
（あれ……なんだろう、これ）
燐は胃のあたりを摩(さす)る。
変なものを食べた記憶はない。
出されたお茶を飲みすぎたのだろうか。石安で流行っているというお茶は、慣れ親しんだものとは違ってかなり濃いのだ。
しかも燐は、後宮に来る前にお茶を飲む機会はほとんどなかった。かつて天翼童子から、お茶を飲みすぎるとお腹が痛くなるから気を付けろと忠告されたのを覚えている。
だからきっと、お茶のせいだ。
燐はまだ話し込んでいる紫貴と百蘭から目を逸らし、再度、胸元を撫でた。

燐は烏鵲殿から出て、側付きの宮女を引き連れて歩いていた。
「さて、どうしようか。帰るには少し早いし」
お茶会は燐が参加してから一時間程度で終わってしまった。玉玲と可宝に命じた写経もまだ終わっていないだろう。玉玲にはなるべくゆっくりしてほしいし、可宝にはしっかり反省をしてもらいたい。
「軽く散歩でもしてから戻りたいな。貴方たちもそれでいい？」
そう尋ねると、宮女たちはおそるおそる口を開いた。
「あの、燐様……実は私、仕事がまだ残っていて。小一時間で終わるのですが、少しだけ行ってきてもよろしいでしょうか」
「わ、私もお茶の在庫の確認と、入れ替えの作業が……」
どうやら二人ともようだ。元々側付きにする予定ではなかったため、終わらせないといけない仕事が間に合わなかったのだろう。
（二人ともいないなら、鼠屋敷に顔を出すのにちょうどいいかも）
「うん、わかった。行ってきて構わないよ」
ちょうど鼠屋敷に近い場所である。

それに、燐はなんだかわけもなくモヤモヤしており、采王の顔を見たい気持ちになっていた。だが華妃という身分だと、一人で勝手に出歩くことは許されず、今までのように気楽に鼠屋敷に行けないのだ。
「私はそこらへんを散歩でもしているから。一時間くらいしたら、この先にある鼠屋敷の近くで合流しようか」
「ありがとうございます！」
ホッとした様子で各々（おのおの）の仕事をしに行く宮女たちに手を振り、燐は鼠屋敷に向かった。
「采王、います？」
鼠屋敷の居間に入ると、どこか懐かしい埃（ほこり）っぽい匂いがする。とはいえ、室内は全然汚れておらず、埃も溜まっていない。日に焼けた古い家具と、長く無人になっていたせいでそんな風に感じるのかもしれない。
采王はお気に入りの、小上がりになっている大床の上で転がり、丸々としたお腹を天井に向けていた。
「おお、燐ではないか。久しいな」
采王は鼠の妖である。普通の鼠の何倍も大きく、そして少々太っている。おっさん

のような仕草で億劫そうに起き上がった。
小さな手で大床をポンポン叩くので、燐は勧められるままそこに腰を下ろす。
「ご無沙汰しています。本当はもっと顔を出したかったんですけど、なかなかそうもいかなくて」
華妃になる前、燐はこの鼠屋敷で寝泊まりをしていたのだ。気を遣わなくていい分、静波殿よりこちらの方が、居心地がよかったくらいだ。
「ふむ、華妃は忙しいのだな。で、今日は何用だ。また面倒な事件でもあったか」
「そういうわけじゃないです。ただの気分転換ついでに話を聞いてもらいたくて」
烏鵲殿で出されたが、食べずに持ち帰ってきたお菓子を采王に差し出す。途端、面倒くさそうにしていた采王の尻尾がピンと立ち、紅色の目を輝かせた。
「ほほう、貢物とはいい心がけではないか。話を聞いてやろう」
「実は――」
燐は采王に、先程思いついた話を聞かせた。
「というわけで、百蘭を正妃にすれば丸く収まるんじゃないかと思うんです。ただ百蘭は、黒曜と丹飛に比べると積極性に欠けるし、今のままでは正妃に選ばれにくい気がして。だから、どうにか上手い具合に力添えできないですかね」

黒曜と丹飛を刺激したくないので、燐が肩入れしていると思われない方がいい。本人にも知らせるつもりはなかった。
燐の説明の間も、采王は音を立ててお菓子を食べている。食べ終えて、髭についた屑を丹念に払い、それからようやく口を開いた。
「なんだ。汝が正妃になるのではないのか？」
「まさか！」
燐はありえない、と首をブンブン横に振る。
「私になれるはずがないです。だって、私はただの孤児なんですよ」
「何を言う。汝は獣操の力の持ち主ではないか。その異能の持ち主といえば、青彷という国の王族の血を引くのであろうが。つまり、血筋はその黒曜とやらと変わらぬ、公主の立場だ」
「そんなわけないですよ。別に血筋に良し悪しがあるわけじゃないんです。家柄はその背負っているものが大きいかどうか。私は何も背負っていない気楽な立場だけれど、その分、親兄弟もいないし、一族の力も使えないんですから」
黒曜や丹飛、そして百蘭とは全然違う。
本来なら、燐が華妃に選ばれただけでもおかしいのだ。

「一族の力がなんだ。汝は恐ろしい力を持っていると自覚しておるのか。我ら鼠に火種を運ばせれば、どんな堅固な城でも一晩で落とせる。毒を運ばせ、井戸に投げ込むでもよい。いや、敵の軍馬を暴れさせて将を振り落とすだけでも戦場をひっくり返せるぞ。一族の力など、霞んでしまうようなすごい力ではないか。そもそも家柄がどうのとみみっちいことを言っておらんで、いっそ他の華妃三人を亡きものにしてしまえば――」

「やめて！」

頭に血が上り、燐は采王の言葉を遮った。

「自分の力をそんなことに使いたくない！　貴方たちを使って人を傷つけるのは、もっと嫌だ！」

思わず大きな声になってしまった。

けれど、興奮は冷めやらず、燐は肩で息をする。

ついカッとなって言ってしまったが、それは燐の真意だ。自分の私利私欲のために動物の力を利用したくはない。ましてや、人の生き死にに関わることなら、余計にそう思う。

そんな燐に、采王は小さな手をどうどう、と振った。

「俺様が悪かった。少し落ち着け」

「わ、私も怒鳴ってごめんなさい……」

「汝のそういうところが我々からしたら好ましい性質なのだ。だから、手を貸してやりたくなる。だが汝がそういう手を使いたくないのであれば、やり方は限られる。それを言いたいだけだ。わかるな？」

「はい……」

采王の声は珍しく優しい。普段は傲慢な言い方をするのに、まるで泣く子には敵わないと困り果てている老人のようだ。そんなことを考えられるくらいには、燐もだんだん落ち着いてきていた。

「燐、その正妃にさせたい華妃は読書家なのだろう。では、多くの知識を持っているはずだ。その豊富な知識は正妃になってから役立つと太子に思わせればよい」

「そう思わせるやり方がわからないんですけど」

「何か事件を解決させるというのはどうだ？　サッと場を収めれば有能に感じるのではないか？　そうだのう、俺様が配下の鼠を使って騒ぎを起こしてやろうか！　それを解決すれば――」

燐がジロッと睨むと、采王は慌てた仕草で小さな手を振った。

「じょ、冗談だ！　だが、方向性は悪くないと思わんか？　幸か不幸か、女黄冠が死んだばかりだ。これからしばらく、後宮が騒がしくなるのは間違いない。遠くないうち、事件の一つや二つ、起きるであろう」
「じょおうかん？　なんですか、それ」
　燐は聞き慣れない言葉に首を傾げた。
「皇帝から直々に黄色の頭巾を賜った女の官吏のことだな。元々は女道士のことを指す。この後宮には俺様含め、妖が複数住んでおるし、あちらこちらに結界が張られている。不思議な力を持つ饕餮像が祀られた神獣殿もな。それらや後宮内の廟や堂を管理する役目があるのだ」
「へえ、そういう役職の人がいたんですね。まあ確かに、この後宮には必要か。でも、女性じゃ官吏になれないですよ。官位をもらっても、扱いは女官だと思いますけど」
　この金鼎国では女性は官吏になれない。政治に関わりたいなら無官のまま官吏の補佐や秘書をするか、試験を受けて女官としての官位を得るしかないはずだ。
「後宮内限定だが、正真正銘の官吏だ。女人限定というわけでもない。宦官にこの地位を与えることもあるからなのだろう。その場合は女の字を取って、ただ黄冠と呼ばれるな」

　なるほど、と燐は頷いた。管理するに相応しい異能を持っているとか、特別な知識を持っている必要がある特殊な役職ということのようだ。
「その女黄冠はどうして亡くなられたんですか？」
「さあてのう。二十年……いや三十年近く後宮にいたはずだから寿命だろう。ここ数年は病を患っておったようだしの。このまま管理する者がいなければ、今後どんな影響が出るやら。ま、この偉大な俺様がいるゆえ、さして問題なかろうが」
　采王は自慢げにそう言い、髭を撫でている。
　しかし燐は采王のことを無視して、脳内で情報の整理をしていた。
「そっか。大事な役目が不在なら、次の人が決まるまでに何かが起きるかもしれないわけね。それで何か起きたら、百蘭に解決させるように仕向ければ……うん、いいかも。わかりました。ありがとうございます」
「おい、無視をするな！　もっと俺様を褒め称えよ！」
　采王は鼠らしくない毛の生えた長い尻尾で、ぺちんと燐を叩く。
　燐は苦笑した。本当に采王は憎めない。
「はいはい、采王はすごいですよ」
　冗談めかしてそう言うと、采王は少し拗ねてしまったようだ。

「まったく、最近ますます粗雑に扱うようになっておるではないか。話はまだあるのだ。その女黄冠は猫を飼っておってな。それが、ただの猫ではないのだ」
　燐は、「猫？」と首を傾げた。そういえば、可宝が赤ん坊の泣き声が聞こえたと言っていたが、やはり猫の鳴き声だったのかもしれない。
　そんなことを考えていると、不意に鼠屋敷の入り口から、微かな物音がした。
「ふむ、燐よ。太子が来たが、何か約束でもしておったのか？」
「え、紫貴様が？　そんなのしていませんけど」
「――燐、いるのか？」
　呼びかけられた声は間違いなく紫貴のものだ。
「采王殿、突然の訪問で失礼する」
　紫貴は鼠屋敷に入ってくると、采王にお菓子の入った箱を差し出した。
「お、手土産とは気が利くではないか。よしよし、滞在を許そう」
　さっきまで拗ねていた采王は、お菓子を見てすっかりご機嫌だ。
　紫貴には采王が何を言っているのか聞こえないはずだが、采王の態度から滞在が許可されたのが、なんとなくわかった様子だ。
「紫貴様、采王に何か用事ですか？」

「いや、燐の声が聞こえたから、つい」
　燐の心臓がドキンと音を立てる。もしかして、百蘭を正妃にしたいという話を聞かれてしまっただろうか。燐の立場で誰か一人に肩入れするのはあまりよろしくないだろう。
「ど、どこから聞いてました……？」
「声が聞こえただけで、内容まではわからなかった」
「そ、そうですか」
　燐はホッと息を吐いた。
「采王殿に何か相談していたのか？　もし何か困っていることがあるのなら、俺も燐の力になろう」
「あ……ありがとうございます。でも悩みとかではないです。ちょっと息が詰まるので気分転換に来ただけで……」
　まさか百蘭を正妃にするにはどうするかという話だとは言えず、燐は言葉を濁す。
「なんだ、俺様に用事ではないなら天井裏に戻っているぞ。まあ、積もる話もあるであろう。ゆっくりしていけと太子に伝えよ」
「ちょっと、采王！」

燐は呼び止めたが、采王はやる気のない欠伸で返し、のそのそと柱をよじ登っていってしまった。鼠屋敷の狭い空間に、燐と紫貴だけが残される。

殺風景な鼠屋敷にあってなお、紫貴の美貌は輝いていた。本当に、彼にだけ光が当たっているように錯覚してしまうのだ。

微かに身動ぐだけで、馬の尾のように結んだ黒絹の髪がサラッと揺れる音すら聞こえてしまう距離では居心地が悪い。

「もしや、采王殿に気を遣わせてしまっただろうか」

紫貴は困ったように首を傾げて微笑む。その角度に至るまで完璧だ。

華妃になってから紫貴の母親を見る機会があったが、成人する年齢の子供がいると思えないほど若々しく、正妃を差し置いて先に子供を産むくらい寵愛されるのも納得な美貌だった。親子なだけあって紫貴ともよく似ている。

燐は綺麗なものが好きで、つい目で追ってしまうことを最近自覚したのだが、過ぎた美しさを目前にすると落ち着かない気持ちになるのだろう。

「……さあ。采王のやることですから、気にすることないですよ」

燐は紫貴から目を逸らして言った。

紫貴と二人きり。そう思うと余計に落ち着かない気分になってしまう。昨年の秋に

はよくあったことなのに、どういうわけか、最近特にひどいのだ。

ソワソワする燐に、紫貴は姿勢を正して問いかけてきた。

「燐。君は正妃という立場をどう思う？」

「ど、どうって……」

やっぱり話を聞かれていたのだろうか。気まずさを感じながら口を開く。

「とても大切なお役目だと思います。皇帝を公私で支え、さらに政治にも関わるのですから、生半可な覚悟ではできないでしょうし……」

「……そうだな。俺もそう思う。だが、父は公を支え政治に関わる正妃と、私生活で心を支える俺の母、二人の間で迷ってしまった。昨秋の事件も元はそれが原因だ。もう、楓葉のような人間は出してはならない……俺はそう思っている」

楓葉は正妃の子であるのに、紫貴より少しだけ遅く生まれたことで、太子になれなかった。それで異母兄の紫貴を恨み、結果的にたくさんの人が亡くなった。その中には、燐の友人だった秀雲もいた。

秀雲のことを思うと、まだ少し胸が痛む。燐は胸を押さえて頷いた。

「そうですね。だから、紫貴様には公私の両方を支えられる正妃を、しっかり見極めてもらわないと、って思います」

「……燐は、正妃になりたいと思わないのか？」
紫貴の静かな言葉に、燐の心臓がドキンと嫌な音を立てた。背中を冷や汗が伝う。それを振り払うように、燐は首を横に振った。
「ま、まさか。私には正妃なんてなれません。正妃って完璧じゃなきゃならないでしょう。わ、私では足りないものが多すぎます」
冷静に言ったつもりだったが、気が付けば声が裏返ってしまっていた。
それが恥ずかしくていたたまれない。
紫貴の顔が見られない。いや、紫貴がどんな表情をしているのかを、見たくないのだ。
燐は慌てて立ち上がる。なんでこんなことを考えてしまうのか、深く考えない方がいい気がする。握った拳に汗が滲(にじ)む。
「す、すみません。そろそろ宮女が待っている頃なので！」
「燐、話が――」
「それじゃあ、失礼します！」
紫貴の言葉を最後まで聞かず、燐は鼠屋敷から飛び出したのだった。
紫貴に宮女が待っていると言ったのも、別に嘘ではない。

そろそろ約束の一時間が経つ頃だ。鼠屋敷から少し歩いたところで、仕事を終えたらしい宮女たちを見つけた。
しかし、何故か百蘭も一緒である。
「燐様、仕事を終えてまいりました。お時間をくださり、ありがとうございます。それから、このことは玉玲さんにはどうか内密に……」
「それはいいけど、どうして百蘭と一緒なの？」
百蘭は燐に向かって会釈をする。
「この本の綴(と)じ糸が急に切れて、頁(ページ)が飛ばされてしまったのです。追いかけていたら通りかかった彼女たちが拾ってくれました」
百蘭の手にしている本はだいぶ古そうだ。確かに綴じてある部分が裂けてしまっている。
「おかげで全部揃いました。ありがとうございます。では――」
「ま、待って！」
踵(きびす)を返そうとした百蘭を燐は咄嗟(とっさ)に呼び止めた。
「百蘭、もし時間があるなら、よければ静波殿に来ない？」
燐は百蘭のことをあまりよく知らない。せいぜい読書家というくらいで、以前鼠に

見張らせていた時もひたすら本を読んでいるだけだったのだ。正妃に推すのであれば、百蘭の人柄や特技、持っている知識、それから異能の有無についても、もっと知っておく必要がある。

「まさか貴方から誘ってくれるとは思いませんでした」

百蘭は本気で驚いているようだ。目を丸くし、いつもの澄まし顔ではなくなっている。

「まあね。ちょっと百蘭と話してみたくて」

百蘭に驚かれる理由もわかる。燐は華妃になってからも、他の華妃との交流は最低限しかしていなかったのだ。

「わかりました。せっかくですし、お招きに預かりましょう。私も燐のことをもっと知りたいです」

断られなかったのは少し驚いた。しかも、彼女から名前を呼ばれたのは初めてかもしれない。百蘭は燐が華妃になってから、一度も燐に興味を示したことなどなかった。ある意味、他人に興味がなく、燐と似た者同士なのかもしれない。

燐は百蘭を連れ、静波殿に戻った。

「それじゃあ、戻って早々悪いけど、お茶を淹(い)れてくれる？」

「かしこまりまし――きゃあああっ！」

側付きの宮女が頷いて居間の扉を開けたところで、突然、特大の悲鳴を上げた。

「ど、どうしたの？」

宮女はその場で腰を抜かし、ドタッと尻餅をついた。震える手で居間を指差す。燐はその指を辿り、居間へと視線を向けて息を呑んだ。

居間は、毒々しい赤色に染まっていた。

淡い色をしていた木の壁には、何かを叩きつけたかのような血飛沫(ちしぶき)が広がり、天井の吊り灯篭(とうろう)には縄がかけられていた。縄にはちょうど頭が通せそうな大きさの輪がある。どう見ても首吊りの形だ。その真下には血文字で死と大きく書かれ、床にも禍々(まがまが)しい血痕(けっこん)が残されている。

「何、これ……」

思わず声が掠(かす)れる。ゾワッと鳥肌が立ってしまうような、不吉な光景だ。さすがに燐でも血の気が引いてしまう。

「た、祟(たた)りよ！　可宝さんが言った通りだったんだわ！」

もう一人の側付きの宮女もその場にしゃがみ込み、顔を覆って泣き始めた――そんな時、不意に冷静な声が響いた。

「……あの、これは何かの余興ですか？」
燐たちの背後で百蘭が顔色一つ変えずに居間を覗き込んでいる。
彼女の冷静な声を聞き、燐も落ち着きを取り戻した。
冷静になってみると、血の独特な匂いが一切しないことに気付いたのだ。
「ええと……そういうわけじゃないんだけど。ありがとう、百蘭のおかげで冷静になれたよ」
燐は改めて居間をぐるりと見回す。最初は驚いたが、落ち着いてよく見れば、血は偽物だとすぐにわかる。
「ねえ、これは血じゃないから安心して。誰かのイタズラだよ」
燐は泣いている宮女にそう教えた。
「へ……？　ほ、本当だわ……。す、すみません取り乱しまして……」
宮女は顔を上げ、目をぱちくりしている。血が偽物だと知り、恐怖心は失せたようだ。
「匂いからすると、朱墨ではないでしょうか」
百蘭の指摘に燐は頷く。
朱墨は修正に使う赤色の墨のことだ。橙（だいだい）の色味が強いものと濃い赤の二種類があ

立ち読みサンプル
はここまで

るのだが、居間に塗りたくられているのは濃い赤の朱墨だろう。一見すれば血のように見える。
「悪趣味なイタズラですね」
「うん……」
燐の脳裏に、こんなことをやりそうな者は一人しか思い浮かばない。
「誰か、可宝を呼んできて」
おかしな噂話では飽き足らず、とうとうこんなイタズラまでするなんて。
「百蘭、変なことに巻き込んでしまってごめんなさい」
燐は改めて、百蘭にペコッと頭を下げた。招かれて変なことに巻き込まれてしまったのだ。気分を害してもおかしくない。
「いえ。これ、宮女がやったんですか？　燐も大変ですね」
だが百蘭は帰る様子もなく、興味深そうに部屋を見回し、首吊りの縄や血を模した朱墨を観察している。
「壁の朱墨は乾いていますね。今塗られたばかりではなさそうです。でも、垂れて床に溜まった部分はまだ乾いていないところもあるので、せいぜい三十分前というところではありませんか？」